

世界最高水準の大型鍛造技術でわが国の航空機産業の一翼を担いたい。

(岡山県倉敷市)

日本エアロフォージ株式会社 代表取締役社長 **佐藤 光司**



プロフィール
1961年大阪府生まれ。1987年に日立金属に入社し、同社の安来工場 特殊鍛造工場長を経て、2011年に日本エアロフォージ株式会社の設立と同時に代表取締役社長に就任。

Q 2013年4月の操業に向けた準備が順調に進んでいますね。国内の製造業が苦境にある中で、貴社の強みについてお聞かせ下さい。

佐藤：社名の日本エアロフォージですが、“エアロ”は航空、“フォージ”は鍛造を意味するとおり、わが社では主に航空機向けの大型鍛造品の製造を行います。これまで胴体部にはアルミないしは炭素繊維の外皮、それを支える骨組みにはアルミが用いられてきました。今後は炭素繊維とチタンとの組み合わせが主流になるでしょう。というのは、両者は電気的な相性がとても良いため機体がより軽く・強くなるだけでなく、耐食性も増すため機内では気圧や湿度を調整することが可能となります。これによって飛行中によく起きる耳の痛みや室内での乾燥が和らぐため快適なフライトを楽しむことができます。最近就航したボーイング787の機体にも全面的に採用されています。

もう一つ分野はジェットエンジンの回転部材です。空気を圧縮する部分には高強度のチタン合金、タービンの部分には高耐熱のニッケル合金が使われていますが、いずれも極めて高い品質と精度が要求されるため鍛造品が用いられています。鍛造とは熱した金属をトンカチでたたいて強度を高める成形法の一つで、古くから日本刀の製造などに用いられているものですが、当社の大きな強

みは5万トンのプレス機を備えていることです。ロシアやフランスには6万トンを超えるものもありますが、いずれも水圧式で冷戦時代に製作されたかなり年代ものの設備です。我々のプレス機は規模の面ではやや劣りますが、純粋な油圧式では世界最大でしかも最新の制御技術で高品質な成形が可能のため、国内での製造でも十分に競争力を発揮できると考えています。

Q 会社設立には多くの企業が出資をされています。

佐藤：高度な鍛造技術をもつ素材メーカーの神戸製鋼所と日立金属、需要家となる世界的な機体・エンジンメーカーであるIHIと川崎重工業、商社の双日エアロスペースと伊藤忠丸紅鉄鋼の6社から出資をいただいています。私どもは素材メーカーから素材の提供を受けて大型鍛造品を製造し、それらは素材メーカーでの中間加工・検査を経て需要家に提供されます。そこでは機体やエンジンのモジュールが生産され、最終的には世界的な航空機体・エンジンの完成品メーカーに納入されます。小・中型のジェット機に新規参入された国内需要家も大切な取引先と考えています。

当社は航空機の製造過程のなかでも素材の成形というごく一部分を担うこととなります。近年、機体軽量化とエンジン性能向上により、民間航空機の需要は堅調に伸びています。さらに今後長期にわたって拡大が見込まれますし、航空機の機体やエンジンの素材自体も鍛造品用途の代替品はあまり見あたりません。個別の民間企業の枠を越えて資金や技術力を結集することで大規模な投資を実現できたのには、このような背

景があります。

2013年4月から操業を開始しますが、当面は火力発電に使用される蒸気タービンやガスタービン部材の量産化を進めていきます。発電効率を上げるには高温に耐える長い羽をもったタービンが必要となるため、発電向けの鍛造品も大きなビジネスチャンスです。それと同時に航空機関連の試作・評価に着手し、機体向けは2014年に、エンジン向けは2015年に量産化することを目指しています。

Q 出資会社の一つである日立金属や地元企業とはどのような連携をお考えですか。

佐藤：私が入社以来24年間を過ごした島根県の日立金属安来工場からは、高度な鍛造技術に携わってきた7人のスタッフを派遣いただくとともに、2012年9月には安来に最終加工や検査を行う新工場が完成し、JR伯備線で結ばれた倉敷と安来との間でニッケル合金を中心とする大型鍛造品の生産体制が整うことになりました。地元企業とは県や倉敷市の後押しもあって、航空機部品の共同受注組織である「ウィングウィン岡山」での研究会などを通じて連携のあり方を模索しているところです。現在、従業員は40人でそのうち半数は地元倉敷を中心に新規採用を行いました。今後は事業拡大に合わせて地元からの定期採用も考えています。

当社の経営理念は「世界に羽ばたく」とシンプルですが、その実現に向けて私は安来工場時代の貴重な経験も活かして「Jフォージ品質」、「安全・環境・品質を織り込んだ生産」、「喜びを分かち合える会社」の三つのポリシーを掲げました。これらの地道な取り組みこそが出資会社をはじめ、すべてのステークホルダーの皆さまのご期待に応えるものだと思っています。

インタビュー・構成：
エネルギー総合研究所